

漢文と翻訳文

浜田 道雄

日本では江戸時代以来漢学が発達して、中国の古典や詩に訓点や送り仮名をつけて読み下し、解釈することが盛んである。

私も小学生のころ父親に教えられながら、唐宋時代の優れた文章や詩を多く読んだ。そうして読み覚えた詩には好きなものもたくさんあるが、文章では李白の「春夜宴桃李園序」が一番好きだ。繰り返し、繰り返し何回も読んで、最後には暗唱するまでになった。

夫天地者万物之逆旅

夫れ天地は万物の逆旅にして

光陰者百代之過客

光陰は百代の過客なり

而浮世若夢為歡幾何

而して浮世は夢の若し歡を為す幾ばくぞ

古人秉燭夜遊良有以也

古人燭をとりて夜遊ぶまことにゆえ有るなり

況陽春召我以煙景

況んや陽春我を召すに煙景を以ってし

大塊仮我以文章

大塊我に仮すに文章を以ってするおや

會桃李之芳園序天倫之樂事

桃李の芳園に會して天倫の樂事を序す

……

……

この文章は六朝時代から唐、宋にかけて流行した駢儷文（べんれいぶん）で書かれているから、多くの句が華麗な対句になっている。だから読んでみるとリズム感が素晴らしく、うたうような高揚感も湧き上がる。そんなところが子供のころの私を魅了したのだろう。

ところでこれらの漢文を読むとき、私たちはしばしば「中国文」そのものを読んでいるつもりになっている。実際には江戸の先人が翻訳した「読み下し文」つまり「翻訳文」を読んでいるのだが。



それにしてもこれらの「読み下し文」はいずれも名文だ。先人たちの文章力の凄さには感嘆させられる。

明治に入ってからには、多くの文豪といわれる人たちが様々な欧米文学を翻訳しているが、どの作品もこんな名文ではない。

もちろん、両者の文章のあり方には大きな違いがある。漢文は私たちが日常使っている漢字で書かれているから、「読み下し文」で原文の表現をそのまま使っても意図するところは素直に伝わる。

一方、欧米文学は日本語とはまったく異なった構造の言葉で書かれた作品だ。その文学思想も文体も日本の伝統的な文学思想に直につながるものではなかった。だからそれを「翻訳」するには新しい言葉を発明しなければならなかっただろうし、新しい文体を創り出して表現しなければならなかった苦労があったに違いない。しかしそんな苦労があったにしても、明治以降の翻訳文学はどうしてあんな堅苦しく小難しい文体にしかならなかったのだろうか。

詩の翻訳の方では事情はだいぶ違っている。上田敏の「海潮音」に収められた「翻訳詩」はみなすばらしい作品だ。ロバート・ブラウニングの詩を翻訳した「春の朝」などは、原詩が中学校の英語の教科書に入っていたから、「時は春、日は明日、朝は七時」と声を出して愛唱したものだ。もうこれは「翻訳」ではなく、上田敏その人の「創作作品」といってもいい。

明治以降の「翻訳文学」も原作とは密接な関係はあるものの、それ自体は別の新たな「創作文学」と考えてもいいのではなからうか。その上で明治以来の「翻訳」という文化活動が、その後の日本の文学や文化思想、そして現代の日本語にどんな影響を与えてきたか、振り返ってみるのも面白いかもしれない。